哲學研究　第百五十三號

アリストテレースの運動について

小島威彦

二

吾々は理論が存在をそれの運動においてながめる必然性をば存在自身からとらへようとした。方法は存在の運動の跡づけとして、存在自身の性格によつて規定されることは當然である。この跡づけにおいて存在の本質をながめとる、このことのためには存在の生成の道順において誰かを見逃すことは敵である。あるものは他のものゝ必然的な前提であり、このものは更にあるものと相關的な連絡のもとにありながら現實を形成する。こゝに理論がかくのごとき相關々係を辿る理由がある。存在の構造を發きそれの本質を把握せんとすることは右でほゞ吾々に親しみをもちえたかとおもふ。ところがわれわれの追求する本質はわれわれに與へられたものゝうちに可能的に孕まれてあらねばならぬ。吾々はそれゆゑ本性上最初なるものゝの救出の始點をわれわれにとつて最初なるものにみた。蓋し普遍なるものは

κατὰ τὸν λόγον には首めであるがわれわれに直接には個々のものが首めである。[1] あらゆる知識はかゝる個々のものと普遍なものとの中間の埒内を運動する。この運動の完結こそ現實性における理論である。[2] この終點にいたつて、ロゴスに規定さるべくある存在は運動なきものと成る。然しこの道は無規定な質料よりであるとゝもに、一定のテロスをめがけて走る。すなはち可能性において在るものは、つねにそれぞれの終極な始源によつて限定されてあるであらう。このゆゑに吾々は、存在をそれの始點よりそれのテロスへの運動において眺むべく餘儀なくされる。理論が必然性の把握と、もつとも好みをもつことはこゝに據つてゐある。[3] アリストテレースが樣々の實踐の解釋を、ロゴスの名をもつて指せるテロスへの關係において作せるは遇然ではない。存在の本質の露出はテロスへの運動においてゐることは度々くりかへされた。しかし私はあまりにも無雜作に運動の意味をうべなつてきたかとおもふ。運動とは何であるかを吾々はさらに尋ねゝばならない。いま學問の對象として措定された第一原因をしばらく心におこう。このことはおそらく吾々の問ひに答ふるよき準備であるであらう。

1 Metaph, 1018a, 32

2 O. Willmann, Aristoteles. S. 16o, S. 175 參照

8 Metaph, 1015a 20 ἀναγκαῖον とはそれなくしては不可能なものである。ところが ἀναγκαῖον もまたそれなくしては在ることも生ずることも出來ぬものとしてうち立てられる。すなはち凡てのものが、それへ向て希求するところのテロス――τὸ, Nico, 1094a――である。それゆゑ必然性において眺むることはテロスへの運動を辿ることに異ならないであらう。このことは同時に存在を ἐξ ἀρχῆς に質料よりそれの形相への發展を辿ることを意味する。なぜなら必然なものは、後にあきらかにされる如く質料のうちにあるから。

理論は原因と原理の把握をめざさねばならぬ。[1] ところが原因あるひは原理は存在の生成に必然的な構造的契機である。[2] かくのごとき第一のもの（τὸ πρῶτον）としてアリストテレースは四つの原理を擧げる。[3] これらのものは存在が展開しゆくおのゝの層であることを吾々は下でのべよう。

まづ質料からはじめよう。πρώτη ὕλη は具體的にはいまだ無規定な基體（ὑποκείμενον）である。それは生成がそこにおいて行はれ、本性上あるべき象へ規定されゆく可能性である。このものは無でもなければ一定の現實性におけるものでもない。むしろ在存の構造的基體として生成の地盤の役割をになふ。有は無からは生じない。生成して在るものはそれの必然的な地盤をもつであらう。そこはそこよりの歷史において自らを地盤として主張する。この歷史において、初めそこに在つたものは

つひに現實性の性格を獲得するにいたる。吾々がさきに學問に與へた瞥見はかくのごとき消息を傳ふるいくらかのよすがであつてくれることを希ふ。質料それ自體は何か或物（τι）でもなく量（ποσόν）でもない。[5] それに附帶的にではなく內屬せるものがそこから生ずるところの最初の基體である。[6] すなはちそれは具體的本質の展開の地盤であつて、毫も平面的な構造の部分を意味しない。規定者たる形相への段階としての義務こそ、まさしくこのものに委ねられてある。しかしこの義務の遂行は質料自身の恣いまゝにするをゆるさぬ、形相との動的關係に俟たねばならないであらう。吾々は次にこの關係を覗ふまへに形相の場所をみとゞけておかう。

1 Metaph, 981b, 28

2 N. Kaufmann; Die teleologische Naturphilosophie des Aristoteles, S. 31 參照

3 Metaph. 983a 26 參照

ἐξ οὗ τινος については Physica A. 3. B, 3. Metaph. A, 3. Δ, 1, 2. 參照〕——原因は嚴密な概念としては、原理である。それに據つて在り、または生ずるところの最初のものである。すなはち何かそのものに內屬せるものがそこから生ずるところのそのものである—— Phys, 194b 24 ——こゝでは原理、形相、概念、本質はすべて同樣の意味のうちにおつる。それはテロスとしてあるひはまた運動の始點として立てられる——Physica. 195a. 10.——。

4 De Anima 412a 9, Metaphy. 1042b 9 參照

5 Metaphy. 1029a 20

6 Physica 190b 2

形相は一般に質料の規定者であるといはれる。このものは一應それゆゑに、質料よりもより多く本質と原理に屬する。[1] 形相があるときには τὸ τί ἦν εἶναι と同じく語られるは結局 κατὰ λόγον の性格に準じてゐある。[2] 思ふにロゴスは存在の形相であるからであらう。アリストテレースは質料が地盤における芽から一定の姿をもつて開き出でたものを形相とよんだ。このものは質料をして質料であるといはしむる丁度そのものである。たとへばあるものゝ本格的なものをAと名づけよう。このロゴスこそ形相である。この概念は單純に孤獨なものではなく、そのものに固有な歴史と周圍に纏はれてあるであらう。したがつて形相はこれらのものから截りはなされてある存在ではなく、反てこれらのものにおいて自らを或ものとして把握せしむるところのものである。ロゴスはこのゆゑに質料と形相との統一者であるといひふるされてきた。このいひならはしかたに隨へば、形相といへどもより高きロゴスに對しては自らをまた質料の位置に見出さねばならぬであらう。われ〳〵はこのことを存在とロゴスとの辨證法的關係において把へようとする。前にわれわれが質料を構造的基體といへるは運動の必然的な契機としてのゆゑである。形相

は契機の救手として、しかじかの構造の上に立つ上層建築である。このものは初め質料とゝもに運動し來つたところのものゝ具體的發展である。この發展は直線のうへを滑べる活動ではない。この際吾々はテンポを正確にはやめるために、いまゝでかりそめにされてきた運動の仕方をひつくるめて斷つておこう。

材木が家に變化する。このためには材木は家に成るべく在らねばならぬであらう。それとゝもに家といふ形相によつて働きかけられねばならない。家に成るべく在るところの質料が家といふ形相によつて現實的に家に成る。こゝに吾々は形相の二樣の位置をみとゞけねばならぬ。家になるべく在るものに働きかけるものは家といふ形相である。家にまで成つたものは現實性における形相である。形相はけだし運動の首めであり尾りであるであらう。かくのごとく働きかける(πάσχειν)ものは恒に現實的であるを要する。これによりて可能的なものが現實的と成る。すなはち可能的に家に成るべく在つたものは現實的な家によつて πάσχειν されて現實性を獲得する。この運動を通じて可能的な家は現實性へ展開する。こゝにおいてもと自らのうちに孕まれて在つたものは自己の本性にまで救ひ上げらる。このように展開は自己自身へ卽ち現實性への運動である。[3] この運動は消極的(στερητικός)

なもの――たとへば消滅――への變化と區別されねばならない。[4] さらにこの兩者は思惟する能力を所有するものが思惟することによつて、あるひは大工が家を建てることによつて現實的になることを仲間にしない。後者はむしろ變化と名付けられることを正當としないであらう。[5] 吾々が辨證法的運動といへるは前者にみるごとき可能的なものが自己自身の本性へ昂進しゆく連續的發展である。いま恰もわれ〳〵はアリストテレースの抒情詩の發展に關する譬へに扶けをかりることができよう。一度はフルニスの時代に完成された美しき抒情詩はティモテオスを世におくるべき段階であつたであらう。しかしティモテオスもわれわれの抒情詩のかくも偉大な部分への役割をはたしおはれる歴史的な詩人である。[6] 抒情詩に救はるべき世界はフルニスにそしてティモテオスによつて、それの現實の殿堂を作りあげた。歌はるべく美しきものゝ形相をわれ〳〵は彼等にみるであらう。ところがもしもわれ〳〵の周圍に詩的な何ものもないならば吾々は不幸にしてティモテオスをもたなかつたであらう。現實にまで成りうるものは可能的に形相を藏してゐなければならぬ。このことに虛僞の惡名をおはせるひとは恐らく目は音を見、耳は色を聽くことさへ眞理にかぞへうるでもあらう。眞理は然し前者に、すなはち形相は

可能的に在るものゝ現實性である、ことに組する。さて吾々は以上から Anfheben の何であるかをアリストテレースに敎はつておかう。運動は可能性から(ἐκ)であるが、それは現實性によつて(ὑπό)であり、現實性へ(εἰς)である。[7]

1 Metaph, 1029a 29

2 Metaph, 1025b 27, 1066b 34

3 De Anima, 417b 6

4 Ibid. 417b 15

5 Ibid. 417b 8

6 Metaph. 993b 15

7 Ibid. 1032a 13, 1049b 24, 29, De Anima, B. 5, B. 6 參照

第三に、右樣の運動の楷梯を攀ぢのぼらしめるところのものとして、τὸ κινητικόν(動かすもの)をたてる。このものは終點に到着せる現實性において甫めて自己の本領を實現する。それは運動の首めであるといふ意味で形相に外ならぬ。從て具體的にはエンテレカイアである。最後に、かくのごとき運動の終點すなはちテロスをアリストテレースは目的(τὸ οὗ ἕνεκα)とよんだ。このものは慾求されるものとして(ὡς ἐρώμενον)運動を規定する。[1] 運動における規定者の意味をこゝにことあらためて叙述

する手數はすでに、質料と形相との雙關々係のところで省かれたかとおもふ。

さて吾々は運動の特異な意味を、質料がそれの形相たるテロスへの道行であるといつた。かくて今はすでに、質料あるひは基體は可能性として、形相と運動因と目的の三原理は現實性として、この二者の關係にキネシスの性格をひとは明かに見出しうるであらう。アリストテレースはかくのごとき原理の側に立つて存在解釋を試みた。蓋し運動は存在と同じだけある。從てテロスは存在と同じだけ多く語られる。[2] このゆゑに存在の把握は運動を最よき原理として選ぶであらう。吾々の運動は則ち、可能性より現實性への展開にそつて存在をそれの必然性において把へんとするかぎりの運動である。こゝでは γένεσις (生成) も κίνησις もそして μεταβολή (變化) も全く同じい意味のうちに落つる。[3] こゝにいふ可能性は決して不可能に對する論理的なものではない。それはいまだ自己の本性を具體せるものではないが ἐνεργείᾳ を通して本質の裝ひをもつてあらはれんとする基體に外ならぬ。それゆゑ μηδέν ではなく第一基體として語られる質料である。[4] 可能性において在るものは現實性への過程のうちに進展されゆく層をたどつて自己の纏へる ἄτελες の衣を一枚々々脱ぎさりゆく。こゝにおいてもと蔽はれたる存在は裸かにされ、それ自身の形相をもつて

現はれる。吾々がロゴスといへるはこの形相のものである。ロゴスは存在の判別者であり把持者である。われ〳〵はこのことが如何にして可能であるか、從て如何なる方法を要求するかを尋ねてきた。すなはち存在をそれ〴〵の運動において把ふべき必然性を明かにしようとした。個々の存在にしたがつて嚴密に窮めつくさんとすることは存在をそれ〴〵のテロスへの道において眺むることの外ではない。アリストテレースが敎養ある人の標として θεωρία をうち立てるは正當であるであらう。[5] ロゴスの嚴格な判決は、ἀόριστον の化粧を剝ぎて存在がかりそめに携へるものを離緣しつゝそれ自身の形相を救出せるものでなければならぬ。こゝにいたるや τό τι ἦν εἶναι (Das was war Sein) は οὐσία ἄνευ ὕλης として具體的なロゴスの支配に屬する。ロゴスはかく、現實的本質の把握と同時にテロスに達する。今や吾々がさきに觸れた分析は、われわれにとつて最初なものゝうちに絕えず在つたところの本性を救ひいださんとする發展であることを想起すであらう。ἄλογος な質料が εἶδος κατὰ λόγον へ交々展開されゆく運動に沿ふものゝみ、やがて存在の一部始終を物語りうるであらう。メガラの光景を如實に傳ふることはメガラへの旅にのみ自由である。存在とロゴスとの辨證法的發展に繚ひつける者にのみ、存在は虛僞と傀儡を退けて自己

の素朴な象を投出すであらう。

1　テロスがこゝにいふ現實性であることについては A. Trendelenburg; Logische Untersuchungen, I.S 59 參照 Metaph, 1044a 36, 1032a 12—1033a 23 參照

2　Ibid. 1065b 13, Ethica, Nico. 1096a 23

3　Physica 200b 35—201a 16 參照

一般にキネシスについてはある反對のものからそれと反對せるものへの Μεταβολή——普遍的な云ひ方をもつてすれば何かから何かへ (Phys. 25b 10)——の側からもあるひは、種類と數量と場所の感性的な運動の側からも語られる。前者の場合では、質料はロゴス卽ち形相とそれのステレシスとの對立に共通の地盤 (Metaph. 1069b 32) であり第三のもの (Ibid. 1069b 3) としてある。運動に必然的な地盤であるところの質料は形相と相俟つて運動の構造をよく明かになしうるであらう。從て吾々の運動の問題は ἐναντίωσις と γένος との關係より最高の類に包攝されゆく運動にふれる暇を他所に讓らしむる。次に後者の場合すなはち運動の三つの範疇は運動を κατὰ τὸ ποιόν 卽ち ἀλλοίωσις (性質的變化) と κατὰ τὸ ποσόν 卽ち αὔξησις καὶ φθίσις (增大と減少) そして第三に、κατὰ τόπον 卽ち φορά (場所的運動) とに分つ。——De Animl 406a 12 Physica 225b 8——。アリストテレースは κοῦ οὐσίαν すなはち γένεσις καὶ φθορά (生成と消滅) をつけ加へて、これらを總括せるものとして Μεταβολή (變化) をあげた——以上の三つにさらに Phys. E. 1.——。吾々は勿論ゲネシスやアロイオシスがキネシスと同じく語られてある場所の多くを想ひあたるであらう。たとへば ὡς τινος καὶ εἰς τι といふ言葉が同樣にこれらのものに用ひられてあることから。あるひはまた、これらのものが接續されてある καὶ の字が「卽ち」と譯されねばならぬ場合のあることから。しかしともかく、生成と運動と變化とは銘々その領土と性質を異にするかにみへる。ところが吾々のキネシスはこれら範疇のそれとは別に、μετὰ λόγου のものを指すことはおのづからであらう。

4　Phys. 192a 31, Metaph. 1007b 28

3 Ethica Nico. 2094b 23—27

吾々は再び可能性の議論にたち還らう。たとへばメガラへ赴かんとする者は一度旅立つや彼の一歩はメガラへのそれである。外的力に遭はざるかぎり彼の航路はメガラによつて必然的に限定されてある。テロスはこのゆゑに規定者であり運動のどの段階よりも首めである。おもふに現實的には可能性よりも現實性が最初であるから。[1] 併しながらテロスに規定された ἐνεργεῖν をして現實性を獲得せしめ得るにはテロスの達成に缺きえない契機をのけものにすることは不可能である。なぜなら吾々がさきに見たごとく、現實性への萠芽は可能性のうちになければならぬ。ひとはこのことを、有機體において芽からそれの現實的個體へ進展する經過がよく物語ることを知つてゐるであらう。[2] 吾々はこゝで必然性が可能性のうちに在ることを示しておかねばならぬ。例へば鋸について云つてみよう。材木を截斷するにはそれは鋭利な齒を必要とする。そしてそれが鐵ではないならば切斷の目的が果されるは不可能である。挽きゝることがそれの機能であるかぎりそれが鐵であることは必然であるであらう。必然的なものは ἐξ ὑποθέσεως であつて ὡς τέλος ではない。惟ふに必然なものは質料のうちにあり、目的はロゴスにおいてあるからである。[3] 一

定の質料はあらゆる勞作が自己の課題を完成せんがために必然である。目的に仕へんとするものは、おしなべて一定の質料を要するであらう。[4] 質料のうちに形相への可能性を眺めることはそれゆゑ存在をそれの始點より究めんとする理論の母である。本性の把握をそれの基體的質料よりテロスへの跡付けにおいてなさんとするアリストテレースの關心[5]こそ彼の哲學に最多くの富を約束したであらう。かくのごとき跡付けにおいてアポリアは次第に掠奪されて具體的把握はテロスの躾けを終る。彼の眼には從て歴史において在るもの――たとへば學問といへども――はロゴスとの鬪ひにおいて自己の形相を發展しゆく質料である。[6] ところで存在とロゴスとのディアレクチックは存在が本性上あるべき自己自身の曝露とゝもに停止する。こゝに至て存在は絶對的な自らに立還る。はじめ雜多な色彩をもつて塗りつぶされてあつた存在は自己自身の地色を前面に出す。それはもはや他の色と絡つてゞはなく自己の獨自な存在の仕方を一色で畫く。この本質の姿において甫めて、運動の地盤として役割を果しきたつた質料はすでに克服されて質料なき王國の建設は完結する。[7] こゝは動搖と變幻なき國であり原理の據れる永久な城郭である。第一哲學にのみ開放されるこの城壁の門戸は πρὸς ἓν に逮ふ方法に通ずる。な

ぜならすべて存在は πρὸς ἓν に συντέτακται されてあるから[8]このゆゑに存在は各々のテロスへの聯關において自己の存在の仕方を顯はにする。私はこのことの見安き例を形而上學書に索かう。すべての健康なものは健康に關係して語られる。ある時はそれを保有することにおいて、他の時はそれを創出すことにおいて、またあるものは健康の兆であり、他のものはそれを受取るものであるがゆゑに。[9] しかし吾々の關心の全部はほとんどこうである。かくのごとき存在の本質へ通ずる方法が存在と交渉する仕方である。われ〳〵はこゝでアリストテレースにおける Dia lektik の根源的な意味に近寄らうとした。

1 Metaph. 1029a 5, 1074a 35

2 Hans Meyer; Der Entwicklungsgedanke bei Aritsoteles S. 73—74 參照

3 Physica, 200a 11

4 C. Bäumker; Problem der Materie in der griechischen Philosophie. S. 268—281 參照

5 Politica, 1260a 31, Ethica Nico, 1694b 11

6 K. Reinhardt; Parmenides und die Geschichte der griechischen Philosophie, S. 178—169 參照

7 Metaph, 1074a 35 參照

8 Ibid, 1075a 23

9 Ibid, 1003a 35

三

右でわれ〳〵はアリストテレースから次のことを聞いた。すなはち運動は可能性の現實性であると。[1] かくて運動は存在の本性への展開として、吾々は存在が自己自身へ還へりゆく道を踏みきたつた。しかし吾々の旅が反て、アリストテレース形而上學の頂點を飾るかにおもはれる唯一のロゴスを、ついに見失ひなへるをひとは恨みと做すであらう。このロゴス――一者は神である――は然し哲學史的構成から面をそむけるひとにとつては死せるものにすぎない。アリストテレースは最初から、唯一の概念卽ち神を撰びださんとする直觀をその時代と共に有つた。彼は從てメリッソスとパルメニデスの場合と同じく、クセノファーネスのテオロギケエをも彼の個有な Denknotwendigkeit のうちへおしこめた。[2] 神の概念は彼の存在解釋における終極の所產であることは偶然ではない。彼は神を運動の τέλος ἄπλως としてうち立てた。何故なら運動するものゝすべては何かによつて動かされるから。もしもそれ自體のうちに運動の原理をもつてゐないならば他のものによつて (ὑφ' ἑτέρου) 動かされることは明かである。[3] この原因の系列を遡り遂に一つの始源であると同時に最後であるところの現實的なテロスに達する。なぜなら運動は無限には進ま

ぬから。[4] こゝにアリストテレースは神の存在を證明した。然し彼の優れたる神の概念はギリシャ古代における ἀρετή に關する彼以前の人々、たとへばクセノファーネスの說くところのものに他ならぬ。吾々がさきに明かにした如く、彼は歷史において存在せるものを檢査しながらそこに在つた本質的なものを具體的なロゴスにまで高める。こゝではすなはち、神は存在とロゴスとの辨證法的發展の最後のものとして、あらゆる存在の歸趨である。それはトーマス、アキノスにおいて創造主にまで祭りあげられた宗敎的なものではなく、寧ろ von unten の神である。中世を通して魔力的な學へ進出さるべき彼の存在學の運命について語ることはわれ〳〵の約束ではない。吾々の問題は神のロゴスが完くされた方法としての運動に關してゞあつた。

1 Physica, 201a 10. Metaph, 1065b 15

2 K. Reinhardt; Parmenides, S. 98—99 參照

3 Physica, 241b 24 Metaph, 1032a 13

4 Metaphy, 1060b 32 Physica, 252b 12, 266b 4

具體的なロゴスは存在との動的關係において繕はれた存在の完き姿である。ロゴスはアポリアをひとつうち損てゝは一歩を前め同時により高きロゴスと對峙す

る。かくて遂に普遍にして具體的な現實性の殿堂の扉を叩く。ロゴスは素より存在を運べるものなるが故に、こゝに到つては存在もともにこの殿堂の欄に倚りかゝる。現實性においてはロゴスと存在とは住家を同じうするであらう。ロゴスはこの具體者を抱きしめるまで戰ひをやすまない。この戰士はひたすらに現實性へ向つてある。一度現實性の絶頂に立つて瞰下するならこのテロスがあらゆるものゝ憧憬の的であつたであらう。このことはアリストテレースの歴史觀をして當時瓦解に瀕せるギリシャへの展望から蔽ふた。彼においてはアテネはover civilized Asiaticとunder civilized Gaulとの中間の位置を占むる。彼等の全く調和された社會が母國であり、彼女こそ完成された歴史の終點であつた。[1] 歴史的なものは現代への可能的なものである。從て歴史的關心は必然的に現代によつて規定される。[2] かくのごとき存在學における運動概念はまた倫理學書と政治學書の精神であつた。われ〳〵の生活において美しきもの、貴きものはすべて現實性にのみ屬する。自己完成的なもの(τὸ αὐτάρκες)は孤獨な生活者にではなく、むしろ兩親に子供に妻に一般にいはゞ友と市民に關して語られる。[3] けだし社會的生活は個人的生活の現實性である。吾々はさきに可能性のうちにテロスへの必然的な萠芽をみた。しかし今やこの發展が

一途に現實性によつて規定されることは明かとなつたであらう。すなはち可能性に於て在るものゝロゴスこそ現實性である。[4] このゆゑに身體は精神により、子は父と母に、あらゆる慾求と實踐は善に、生活は社會によつて規定される。惟ふに精神は生あるものゝ身體の原理であり、[5] 最初なるものは種子ではなく反て終極を具したもの(τὸ τέλειον)卽ち人間であり、[6] さらに社會は個人より本性上 πρότερον であるから。[7] このゆゑに淨福は社會的生活を營みながら自己の本性にかへることによつてのみ購はれる。幸福への人間の根原的な衝動は從てその實現の舞臺を社會にもたねばならぬ。ひとはこゝで立廻つてのみ現實的な人間の名において觀衆にむかつて臺詞を語り動作を傳へる。かく人間と人間との交渉において德はかちえられるであらう。[8] われ〳〵の生活の關心は、すなはち現實の社會につねに限定されてある。蓋しこのものは生活のテロスとして、われ〳〵の慾望と行動とそして反省を一向きにする。生活はかくして社會における人間的幸福へ、本性上あるべき自己自身へ、情念の數々とゝもにさま〴〵の實踐を歷しつゝもがきゆく運動である。このゆゑに生活はテロスにおいて憩ふまで絕えずわれ〳〵に不安をおしつける。おどろきとおそれに惱かされながらも生活はテロスへの旅を續けるであらう。たゞ εὐεργεῖν するも

のにのみテロスが獲得されるよき望みをもつて。[9] ひとは安らかなもの、美しきもの、すべて現實性において語られるものを此上なく愛する。しかしこれらのものゝ、成就の仕方こそ吾々のこゝろを奪ふ。

1 B. Jowett; The Politics of Aristototle, vol, I. cxxvii 參照
2 Ed. Meyer; Geschichte des Altertums I. 1. S. 195 參照
3 Ethica Nico. 1097b 8 Politica, 1253a 1
4 De Anima, 415b 14
5 Ibid, 412a 27, 415b 8
6 Metaph, 1072a 35
7 Politica, 1253a 25
8 Ibid, 1260a 10
9 Ethica Nico. 1099a 3 オリピアの競技において最美しく強きものは、王冠を戴くことではなく寧ろたゝかひ戰てるものである。あたかもかくのごとく、行ひおほせる者が生活において美しきものを正當に頒ちもつにいたるであらう。

仍て吾々は運動の二つの必然性の交錯をわれ〳〵の生活へひきおろしてみた。そこでわれ〳〵は形相は質料より、全體は部分より κατ' ἐντελέχειαν に初めであること[1]を歴史と生活について注意した。ところが πρότερον は樣々に語られるのであるが、[2]吾々のそれは可能性と現實性との關係からである。可能性よりいへば質料は形相よ

り初めであるが現實性よりいへば正に逆である。吾々はこゝにアリストテレースの存在解釋の固有な態度を見出すことができる。吾々は最後に、辨證法に戻つて運動概念を革めて明かにしよう。彼によれば可能性からいつて首めのものが理論の直接な要素である。ところが直接なものは外からの媒介を拒否してゐるかぎり、自分自身において自らを媒介せるものである。それゆゑに自らを自分自身に關係せしめるところの Für-sich-sein が直接性とよばれるであらう。それは自らにおいては分たれず他のすべてのものを自分自身から排除する Das Eins である。それはたゞ自分自身へのみ關係し自分自身への否定の關係としてあるにすぎぬ[3]。かくのごとき自分自身に對して在るものは直觀あるひは感知の直接性である。このものは吾々の最廣い意味における存在あるひは *pathopeva* である。この直接なものは自分自身にのみ關係する一つの形相である。併しそれは negativer Begiff ではない。もしも空間的あるひは歴史的な存在が全く否定的な意味において直接的であるならば、ロゴスは存在から遠退いて、たゞ純粹思惟の抽象的要素のうちに手を拱ねてたゝづむの外ない。直接なロゴス(判斷)は存在のそれである。このゆゑに存在の內在的聯關と必然性とをば具體的なロゴスにまで救ひ上げることが出來る。直接性はこゝにい

たるや、沈默のうちに身をひそめる。このことについては形式論理學は何ごとをも語り得ないであらう。吾々はこの直接的なものから、そのうちに在つた本性への展開を跡づけんとする。存在は直接的なロゴスと倶にあるところのもの――ヘーゲルにおける Sein mit einer Bestimmtheit, die als Unmittelbare oder seiende Bestimmtheith ist――である。[4] それゆゑ直接なものは論究をも拒むところの全く否定的な意味における Das in sich seldst Vermittelte ではない。可能性からいつて直接のものは存在とロゴスとの辨證法的運動において止揚される。現象(Schein)はこゝにいたつて解消する。それは否定されたのではなく反て具體的なロゴスにおいて現實的始源(absolut Erstes)にまで發展されたるがゆゑに、たゞ verschwinden したるにすぎぬ。この終極段階における realisierte Begriff こそロゴスが全體であるところの認識である。[5] 方法はそれゆゑ外的な形式ではなく、むしろ內容の魂であり生けるロゴスである。ロゴスは自らの契機を救ひながら概念の Totalität を獲得する。ヘーゲルの systematische Totalität といへるは正にかくのごときものであるであらう。辨證法は終極もしくは現實性のうちに解消されたる單純な Fürsichsein を救ひ出さねばならない。すなはちロゴスは存在へ働きかけ、そこに在つたところのものを自分自身のうちに現實的にする。この場

合可能的なものは蔽はれたる狀態における現實性ではなく、ある他のものにおいて運動が起されそのものゝうちに自らを現實的にするところのものである。[6] この現實性こそ παρουσία の概念である。運動は他のものによつて起されるのであるが、そこに現實的に成るものは初め自分自身のうちに持たれてゐなければならぬ。このゆゑに παρουσία においては可能的始點と現實的に第一のものとは同じいであらう。從て理論は現實性によつて運動させられる可能性が現實性へ展開する道を辿るは必然である。かくのごとき展開過程の跡付けを吾々はアリストテレースの辨證法とよんだ。辨證法が存在把握に要求されるは、Sache と Denkformen とに對應して立てられた方法であるからである。このことこそアリストテレースの運動概念の強さであるであらう。

1 Metaph, 1019a 9 1029a 5 1049b 5 1074a 35

2 Ibid, 1018b 9 參照。アリストテレースはこゝで πρότερον の意味を八つに分類し、最後に κατὰ δύναμιν καὶ κατ' ἐντελέχειαν をあげて明てゐる。この第九の意味が他の八つのものとは全然異つた見地よりなされたことは吾々の扱つてきた運動概念によつかであらう。

3 Hegel; Encyclopädie S. 118 參照

4 Ibid, S. 115

5 Ibid, S. 204—205

6 Metaph, 1019a 15 G. Teichmüller; Aristotelische Forschungen, III. S. 51 參照 ——終り—— 一九二八、九、七